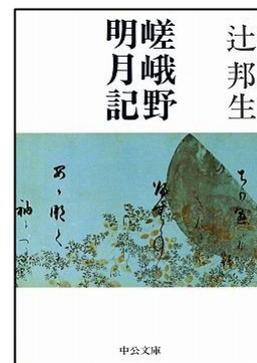


## →鷹ヶ峯の芸術村、『嵯峨野明月記』の世界で太夫道中を見る

2018. 4. 8(日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 533 回 参加報告

『嵯峨野明月記』は、戦国の世に対極するかのようによ永遠の美を求め、<嵯峨本>刊行に賭けた本阿弥光悦・俵屋宗達・角倉素庵の献身と情熱と執念を描いた作品です。「一の声」「二の声」「三の声」という書き出しが印象的で、いまでもその活字が視野に残っていますが、改行ナシの独白体で書かれた作品なので読み始めて戸惑い、難しそうだと思っているうちに明月記の作品世界に引き込まれていました。<嵯峨本>自体を、その一部ですが「琳派展」で見たことがあったので、あの意匠を凝らした豪華本を思い浮かべ、制作者3人の熱気を感じながら読み進めました。



<嵯峨本>は、日本に印刷術が伝わった初期に出版されたものですが、鷹峯の一角を徳川家康から拝領して「光悦村」なる一大芸術村が存在したからこそその偉業だったかもしれません。そんな光悦のひと業を分かりやすく書いてくれているのが清張の『小説日本芸譚』で、光悦の他に、運慶・世阿弥・千利休・雪舟・古田織部・岩佐又兵衛・小堀遠州・写楽・止利仏師が採り上げられており、清張にしてはと異色を感じる短編小説集でしたが面白かったです。



太夫道中を見物した後、私たちは伏見桃山城落城の際の床などが天井に張られ、「血天井」でも知られる源光庵へ。ご住職様が、ご本堂北側の円窓と角窓を示されながら禅の心を表現したものと説明して下さい、まあいい心が大事なのだと思改めて納得しました。皆で廊下の上の天井に染みを見付けて「あれは足の裏？ あれは胴体？ 腕？」とひと騒ぎの後、光悦寺は有名なので入寺せず、紙屋川へと回り込んで

川沿いの裏道を歩きました。そこは、一般の観光客は通らないような所で、この辺りを何度か訪れている私も初めて歩く道。流石に「散歩の会」と感心していると、境内にシャクナゲが咲き競うのがチラと見えて吟松寺門前へ皆、吸い込まれました。浄土宗の寺院だそうです、事務局の人がご住職に許可を取って下さり、境内に入ることが出来て感激。しばしシャクナゲの淡いピンクに見とれましたが、青紅葉も沢山あり、ここは隠れた紅葉スポットですね。今秋、是非再訪しようと思います。



さて、再び回り込んで表筋へ出、瑞芳寺の隣の駐車場フェンス際に「本阿弥光悦屋敷跡」の石標を見付けました。事務局の人も「確か

この辺…？」と言いながらでしたが、石標が裏向きで、駐車場の内側に向いているのがイジワルでした。



最後に、お土居跡の向こうに花札の「芒」(芒に月、またボウズともいう)のモデルになった鷹峯をもう一度見て、このお土居から続いているというお土居②、そして解散地の今宮神社へと向かいました。写真に見えているのは鷲ヶ峰かしら？鷹峯は三山あり、向かって左から鷹峯、鷲ヶ峯、天ヶ峯なのだそうですが、いつも、どれがどの山かよく分からないのです。すみません。

そして今宮神社へ到着。今日はちょうど、当社の「やすらい祭」当日で、私は名物「あぶり餅」をいただきながら、練り衆が来るのを待ちました。私は何となく、いつも北側の「一和」さんでいただくので、どちらのお店(向かい側は「かざりや」さん)の方が美味しいかは分かりませんが、きな粉と白味噌を延ばしたタレが炭火で焦げて、いつもどおり香ばしくて美味しかったです。<報告：岩井よおこ>